

特集

メキシコにおいて2018年～2019年の移民流入に対応した人々の証言 ー災害管理にかかわるトピックについての 回顧的研究ー

ガリバイ ルビオ カルロス ロドリゴ¹・中野元太¹・

ペラルタ グティエレス アストリッド レネ¹・タラベラ セルバンテス ヘラルド²

Testimonies of Responders to the Migrant Caravans in Mexico in 2018–2019: Retrospective Study of Topics Considered Relevant to Disaster Management

Carlos Rodrigo GARIBAY RUBIO¹, Genta NAKANO¹,
Astrid Renneé PERALTA GUTIÉRREZ¹ and Gerardo TALAVERA CERVANTES²

Abstract

Mexico's geographic proximity to the United States has made it one of the main routes for mixed migrant flows. Against this backdrop, in October 2018, a public call was made through social networks of individuals in Central America to migrate openly to the United States, triggering a massive caravan. Due to its size and the needs of its members, the caravan triggered a complex response in Mexico, highlighting significant challenges in disaster management and humanitarian response. This study aimed to retrospectively identify critical disaster prevention and management themes in order to address complex mass migration situations. Interviews were conducted with key decision-makers belonging to international, governmental, and civil society organizations involved in the caravan response. The results highlight, for example, the critical role of cultural sensitivity in a transparent and holistic governmental response in which the agendas of different groups of migrants as well as the well-being of local communities are considered, thereby promoting understanding between the two early on.

キーワード：移民キャラバン，災害リスク管理，意思決定，メキシコ

Key words: migrant caravan, disaster risk management, decision-making, Mexico

¹ 京都大学防災研究所
Disaster Prevention Research Institute, Kyoto University

² 市民社会組織 Casa Refugiados
Civil Society Organization Casa Refugiados

0. 翻訳にあたって

本論文は、本号に掲載されている特集記事「Testimonies of responders to the migrant caravans in Mexico in 2018-2019: Retrospective study of topics considered relevant to disaster management」を、第二著者が日本語訳したものである。一部、中米に特有の事情もあるため補足を加えているところがある。そのため、完全な対訳ではなく、読みやすさも考慮した表現とした。

1. はじめに

過去数十年間、世界は気候変動や技術的、社会的、人口動態的な変化に起因するグローバル・リスクの複雑な進展に直面しており、近い将来についても楽観的な予測はできない。グローバル・リスク報告書 (Cavaciuti-Wishart et al., 2024) は、地球温暖化の影響とそれが地球システムに与える影響が、世界中の人口規模と人口構造の変化を引き起こすと結論づけている。さらに、世界的な社会の二極化傾向と経済的不安定は、世界的な移民動向の最重要要因のひとつである。

人々が移住を選択するということは、一連の不安定な社会状況の帰結であり、「不本意な移住」は、今後10年間で7番目に深刻な世界的リスクになると推定されている (Cavaciuti-Wishart et al., 2024)。これを受けて、世界中の政府は、移動に関する現在および将来の差し迫った課題に備えるため、対処メカニズムの改善、実施、再考に取り組んでいる。

人道的な理由で保護を必要とする人々が移住先に適応していくことも含め、安全で組織的かつ合法的な移住を促進するための国際的な取り組みが行われてきたとはいえ、この問題の完全な解決策は未だにない。移民に対する政治的・社会的スタンスは、メディア報道や政府の対応、移民の安全保障、法的地位、一般的条件においてかなりの影響を与える一方、通過ルート、移民キャラバンの規模と構成、移民の希望は、移民と政府当局との関係に影響を与える。このような困難な状況下で、人道支援ワーカー、様々な組織、州・地方政府は、移民キャラバンのニーズに対応することと、移民

の流入によって影響を受ける地域社会の懸念に対処することの間で、バランスを取ることに困難を抱えることになる。

このような状況への対応に貢献するため、本研究では、主に中米諸国から移動してきた、過去10年間で最大規模かつ最もメディアを賑わせたミックス・フロー・キャラバン^[1]を対象に、メキシコ国内での対応に関連する課題と災害リスク軽減の要素を回顧的に検討する。本論文では、特に移民キャラバンがメキシコシティに到達し、パリージョ・スタジアムに滞在した際に、積極的に対応に関与した意思決定者の証言を通して、国際的な移民対応についての勧告の妥当性を検討した。

2. アメリカへの移住

The College of the Northern Border (COLEF) によると、メキシコとアメリカの間には、隣接性だけでなく、経済的・政治的な非対称性があるため、メキシコ人やその他のラテンアメリカ人は、より良い生活を求め、迫害から逃れてアメリカに移住する (Contreras Delgado et al., 2021)。中米における移住のルーツはグアテマラ内戦 (1960～1996年) とエルサルバドル内戦 (1979～1992年) で、数十万人がメキシコやアメリカに逃れたことにあるとされる。この傾向は現在も続いており、メキシコにおける難民認定申請者数は2013年の1,296人から2019年には70,302人へと5,000%以上も増加している。2015年以前は、ほとんどの移民がホンジュラス、エルサルバドル、グアテマラから来ていた (Contreras Delgado et al., 2021)。しかし、2015年以降、移民の出身国は多様化し、カリブ諸国だけでなくベネズエラ人からの申請も増加している。例えば、ハイチ人の申請者数は2018年の76人から2019年には5,538人に急増し、キューバ人は218人から8,277人に増加した。高レベルの暴力、政情不安、制度的貧困、機会の欠如も、この種の大量移住の要因となっている (COLEF, 2019)。

メキシコは地理的にアメリカに近いため、北アメリカ大陸の南部からの移民やその他の移動者を封じ込める戦略的な立場にあり、メキシコの公共政策の策定に影響を与える大きな国際的圧力を受



図1 北部へのさまざまなルート (UNICER, 2018)

けている。

メキシコのタバチュラ（メキシコとグアテマラ国境）からマタモロス（メキシコとアメリカの東側国境）までの約1,780キロメートル、あるいはティファナ（メキシコとアメリカの西側国境）へと抜ける約3,700キロメートルの道のりをメキシコ各州の鉄道や高速道路に沿って北上する（図1参照）。

これらのルートは、治安が悪く暴力のレベルが高いメキシコの州を横断している。2018年には、当局のフォローアップが不十分ため正確な数字は不明だが、多くの移民が誘拐され、恐喝された（BBC World, 2018）。距離と地形が旅を極めて困難なものにしており、完遂するのに数カ月を要することも多い（Hale & Ma, 2023）。

メキシコに入国する移民の多くは、正式な書類を持たずに入国する。その中には一時的な居住者の資格や難民の資格を申請する者もいる。内務省

移民政策ユニットの情報に基づくメキシコ共和国上院の報告によると、COVID-19の流行により2020年には減少したものの、移民の非正規流入は2019年の182,940人から2023年には441,409人に増加した（Instituto Belisario Domínguez, 2023）。特に2013年以降、メキシコ国民のアメリカへの移住は、不法滞在よりは、一時的な就労ビザを取得することによる合法的な滞在が増えていることは言及に値する（Verduzco e Igartúa, 2022）。

2018年10月上旬、主にソーシャル・ネットワークを通じて、移民の希望者たちは集団で移動することを発信し、アメリカに移住することを目的としてホンジュラスのサンペドロスーラに集まった。10月12日、160人が移民キャラバンを結成し、この移民キャラバンに関する情報はすぐさま拡散され、10月17日までに、北の三角地帯と呼ばれるグアテマラ、エルサルバドル、ホンジュラスから約4,000人が参加した（Núñez García & Dávila Pérez,



図2 パリージョ・スタジアムのキッズ・パビリオンで遊ぶ子どもたち
(写真は UNICEF Mexico の Vergara 氏撮影・提供)

2022)。他の中米・カリブ海諸国からも移民キャラバンに加わり、移民らは「私たちは（自分の国を）出たいから出るのではなく、暴力と貧困によって追い立てられるのだ」というスローガンの下、共に移動することになった（COLEF, 2019）。政治不安、構造的貧困、高レベルの暴力は、移住する動機である。また移民が生じるのは、部分的には気候変動の結果であり、熱帯低気圧の影響にさらされている中米に見られる事情である。移民たちに共通する信念は、大人数で一緒に移動すれば安全で、より良い（国境の）通過条件が得られるというものだった。

天候や政治的な出来事など、いくつかの要因が移民キャラバン形成のタイミングに影響を与えた（Albicker et al., 2018; The Associated Press, 2018）。メキシコでは、移民に対して1年間の自由な（国境の）通過と労働を認めるという提案が政府によってなされたが、このような政策を実施した経験と、実施するための資源を持たないメキシコ政府には大きな負担となった（Cantalapiedra, 2022）。ペーカー公共政策研究所は、アメリカにおける移民政策の厳格化が移民の切迫感を引き起こし、移民キャラバンの規模や特徴を助長し、それによって議員や対応者への圧力が高まったと述べている

（Hale & Ma, 2023）。

最初の移民キャラバンは10月19日にメキシコ南部の国境を越えた。キャラバンには、農民や労働者から教師や医療従事者まで、あらゆる年齢層や背景の人々が含まれていた。家族連れもいれば、同伴者もいない未成年者もいた（The Conversation, 2018）（図2）。10月22日までに2,000人以上の子どもたちが入国し（Bermejo, 2018）、数週間が経つにつれ、メキシコを旅するキャラバンの人数を計算するのが難しくなった。

メキシコ最南端のチアパス州での受け入れ当初は、不明瞭な政府方針、劣悪なキャンプの環境、政治的圧力、準備不足が際立っていた（Albicker et al., 2018）。キャラバンが拡大し、アメリカからの政治的圧力が強まるにつれ、メキシコ当局はより移民を制限するアプローチを取り始めた。しかし、その対応に一貫性がなく、当局は一部のキャラバンを解散させたり、一部のキャラバンに通過ビザを提供したり、別のケースでは大規模な強制送還を実施したりした。その結果、チアパス州タバチュラの移民ステーションはあつという間に溢れかえり、キャンプ地は強制的に開放された。

移動の各段階で、受け入れ条件、支援条件、輸送条件は、各地方自治体がとる移民に対する政治



図3 チアパスのレセプション・センター（第四著者撮影）

的立場によって変化した。移民キャラバンが州境を早く移動できるようにバスを提供した州もあれば、図3のように人道的支援を提供する州もあった。2018年11月はメキシコのペニャ・ニエト大統領の政権最後の月であった。2018年12月1日、メキシコで新政権が発足し、国内与党に支持されたオブラドール大統領の開放的な精神と宣言に倣った州は、メキシコ領土を横断するための合法的な手段を移民に提供し始め、政府の例外的な対応を引き出した。

2018年10月のツイッター投稿の分析によると、メキシコ国民の半数以上が移民の通過を認めるべきだと考えており、移民の数が増えるにつれてその立場は変化し、地方政府にさらなる負担を強いていた (Cantalapiedra, 2022)。アメリカでは、移民キャラバンはかなり早い段階から脅威と見なされていたと報告する研究もある (Leutert, 2020)。

11月5日、キャラバンの最初の集団が首都メキシコシティに到着した。メキシコシティ行政は国民与党と連携しており、政治的にも、社会的にも移民を支援する意欲が非常に高かった。利用可能な州政府の人員で総合的な対応が実施され、パリージョ・スタジアムに移民キャンプが設置され

た (Gabriela Rojas, 2018)。そこでは、避難所、衣類、食事、通信サービス、警備、医療、水・衛生設備、法的支援、心理的支援、育児、教育活動が、ピーク時には1万人もの移民に提供された (Amnesty International, 2018)。地方政府の負担は並大抵ではなく、国内外からの協力を必要とした。図4に示すように、移民の子どもたちはレクリエーション施設も利用できた。

メキシコシティ行政は1日あたり約660,000ペソ（約33,000米ドル）を食費に費やしたと報告している。1食の食費は平均40ペソ（約2米ドル）で、市は毎日約16,500食を提供していた (Moreno, 2018)。その他の費用には、シェルター施設の維持費、センターの日常運営費、医療費、交通費、人件費などが含まれた。行政のリソースに加え、非政府組織 (NGO)、国際機関、宗教団体 (図5参照)、一般市民も貢献した。^[2]また、図6・図7もパリージョ・スタジアムの様子である。

パリージョ・スタジアムに設置されたキャンプは、キャラバンに対する政府の対応としては最大規模のものであり、国際機関、国家機関、市民社会組織が一体となり、メディアでも大きく取り上げられた。そのため、この対応をめぐる最も関連



図4 メキシコシティのパリージョ・スタジアムでサッカーをする子供たち（第四著者撮影）



図5 パリージョ・スタジアムで対応に協力した宗教団体のメンバー（第四著者撮影）

性の高い災害リスクマネジメントと緊急事態管理の問題を回顧的に検討する研究機会となった。

メキシコシティに入った後、キャラバン隊はグループに分かれ、メンバーの状況や好みに応じて、メキシコ北部に向かう異なるルートを歩いた。短い危険なタマウリパス州方面に歩く者もいれば、より安全だと思われる長距離ルートのティファナ

方面に歩く者もいた。

3. 意思決定者へのインタビュー

前述したように、政治的スタンスは政府が移民とどのように関わるかに大きく影響する。それにもかかわらず、仙台防災枠組のような、政府がこうした状況に直面したときに従うべき最低限の基



図6 メキシコシティのパリージョ・スタジアムで遊ぶ子供（第四著者撮影）



図7 メキシコシティのパリージョ・スタジアムでの移民集会（第四著者撮影）

準や勧告が存在する。

人道支援から生まれたスフィア基準 (Sphere Association, 2018) は、災害救援活動の最低基準を提供することを目的としている。これらは後に、機関間常設委員会や国連児童基金 (UNICEF)、国際移住機関、国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) などの国際機関によって凝縮された一

連のガイドラインに翻訳された。彼らの提言のいくつかをここに掲載する。

- コミュニティ・リーダーや個人の意見を考慮し、移住者を防災対策に参加させる。
- すべての人に情報が届くよう、多言語で情報を提供する。

- ・移民と当局との信頼関係を構築し、権利が認められ、保護されるようにする。
- ・当局から移民に至るまで、あらゆるレベルでの混乱を防止するための明確な省庁横断型の政策を策定する。
- ・移民に特有のニーズと脆弱性を認識させ、適切に対応できる人員を確保する。
- ・滞在中の移民の処遇を見守る明確なメカニズムを備えた安全な空間やシェルターを配備する準備を整える。
- ・メンタルヘルス支援や子ども向けの特別なサービスなど、保健医療サービスへのアクセスを確保する。
- ・移民に対する差別的な行動や攻撃を減らすような、地域社会に根ざしたコミュニケーションを展開する。

本研究では、2018年から2019年にかけて移民キャラバンの対応に深く関わった国際機関、政府機関、市民社会組織の意思決定者5人を対象に、2024年11月から12月にかけて、非構造化インタビューを実施した。各インタビューはスペイン語で録音され、Microsoft WordとCopilotを用いて書き起こし、英語に翻訳した。

インタビュー参加者には、移民キャラバンに対応した経験について自由に語ってもらった。30分間のディスカッションの後、インタビュー参加者は、自分たちの経験を振り返って重要だと思われる防災と管理のトピックを挙げ、将来、対応するであろう者に向けたメッセージを話してもらった。そして、各インタビュー参加者の主な意見を比較するため、インタビュー全文を要約し表1を作成した。将来へのメッセージに相当する部分についても、具体的な分析を行った。

インタビュー対象者は次の5名である。ホセ・ベンタ氏は移民キャラバン対応時、メキシコ赤十字社の全国本部に属しており、移民キャラバン支援の組織化に携わり、エル・パリージョ・スタジアムでの活動の調整、展開、フォローアップを行った。インタビュー当時は、メキシコシティ総合リスクマネジメント・市民保護省で勤務してい

た。二人目は、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）のシメナ・アロヨ氏である。UNHCRは、移民キャラバンがタパチュラに到着して以来、移民キャラバンの進展をフォローする上で不可欠な役割を果たした。UNHCRは、メキシコ政府から、移民キャラバンのキャンプ地への立ち入りを許可された数少ない機関のひとつである。三人目は、パオラ・ゴメス氏である。ゴメス氏は国連児童基金（UNICEF）のメキシコにおける教育担当官で、移民に対する教育的対応を担当し、活動の立案とフォローアップにおいて重要な役割を果たした人物である。四人目は、ヘラルド・タラベラ氏である。タラベラ氏は、NGOであるカサ・レフヒアドス（スペイン語で、避難者の家の意味）のメンバーで、同団体は、難民、移民、難民申請者、避難民の救済対応や人道支援に携わる他の団体と緊密に協力しており、自身の経験を語った。五人目は、マリアナ・メンドーサ氏である。メキシコシティ総合リスクマネジメント・市民保護省に勤務しており、メキシコシティでの移民対応の全期間活動し、メンタルヘルス支援とシェルター関連の全体的な監督を担当した。大規模な移民キャラバンの複雑さと規模は、政府機関や市民社会組織から数千人のメンバーの参加を必要とした。そして、さまざまな機関から主要な意思決定者の証言を集めることで、彼らの組織が経験した緊張や課題について、より深い理解が得られる。また、インタビューで表明された見解、考え、意見は、あくまでもインタビューに回答した個人に属するものであり、必ずしもインタビュー対象者の雇用主や組織を代表するものではない。

4. 結果

インタビューの全文と書き起こしは、補注のURLで公開している^[3]。表1はインタビューに基づき、著者によって主要なメッセージを抽出し、それを8つの構成要素、すなわち、「全体的な印象と課題」「受入側の訓練と準備」「移民による支援への期待」「保健衛生」「政府・支援団体の対応」「今後の課題と提言」「文化的感受性とコミュニティの関与」「長期的な解決策」に分けて整理した

表1 インタビュー結果

	ベント氏 (メキシコ赤十字社)	アロヨ氏 (UNHCR)	ゴメス氏 (UNICEF)	タラベラ氏 (カサ・レフヒアドス)	メンドーサ氏 (メキシコシティ)
全体的な印象と課題	受け入れにあたる初動対応者への心理的トレーニングの必要性を強調。	移民の大量拘束に言及。家族の分離と健康問題を強調。	連邦政府と地方政府間の調整改善の必要性を指摘。また、シェルター設置のための能力強化の必要性を指摘。	より良い調整の必要性を強調。トラッキングと情報管理のための正確なメカニズムの欠如を強調。	社会的・情緒的支援の重要性とガバナンスの課題を強調。
受入側の訓練と準備	地政学的・文化的背景を踏まえた初動対応者の訓練の重要性を強調。	心理的サポートや健康診断など、より良い計画とリスク管理の必要性を強調。	リスク軽減、人権、心理や教育を含む健康に関するトレーニングの必要性を強調。	移民特有のニーズや、人道支援について訓練する必要性を強調。	移民、人権、文化的感受性に関するトレーニングの重要性を強調。
移民による支援への期待	移民による期待の高さと、支援の際の文化的感受性 (文化的配慮) の重要性を指摘。	人道的ビザの混乱した実施と明確な政策の必要性を強調。	シェルターを設置するにあたって、より良い調整と資源の必要性を強調。	緊急支援における市民社会組織の役割を強調。	継続的な支援を保証するため、より良いフォローアップ・メカニズムの必要性を強調。
保健衛生	水、保健、衛生のニーズ (WASH) に関する国際基準に準拠することの妥当性を強調。	疾患の発生と不十分な保健施設を強調。	衛生施設と保健施設が必要に対して不十分と指摘。	適切な健康診断と医療の必要性を強調。	社会的・情緒的支援とレクリエーション活動の重要性を強調。
政府・支援団体の対応	より良い社会教育と言語障壁の解決策の必要性を強調。	複数の政府機関が関与しており、連携が取れていないことを指摘。	調整メカニズムや将来の出来事に対するより良い備えの必要性を強調。	外務省の役割とより良い調整の必要性を強調。	ガバナンスの課題と効率的な意思決定の必要性を指摘。
今後の課題と提言	移民との衝突を防ぐため、初動対応者は文化的認識を深める必要性を強調。	地域社会の関与を考慮した包括的なリスク管理の必要性を強調。移民を受け入れてきた地域社会だけでなく、近い将来この問題に直面する可能性のある周辺地域社会も同様。	政府の能力強化と組織間の調整の重要性を強調。	正確なデータ管理と中長期的なソリューションの必要性を強調。	共感、理解、組織能力の継続的改善と人材育成の重要性を強調。
文化的感受性とコミュニティの関与	移民の関心を理解することの重要性を強調し、役立つ情報を提供する必要性。	文化的背景を理解し、地域社会を巻き込む必要性を強調。	統合された組織的な対応を促進するために、文化的感受性を考慮した具体的な研修を開発する必要性を強調。	文化的感受性と効果的なインクルージョン戦略を促進する必要性を強調。	移民との信頼関係を築き、理解を深めることの重要性を強調。
長期的な解決策	社会教育とより良い総合的な対応策の提案。	移民の根本原因に取り組むことを強調し、メキシコが経由地から最終目的地の選択肢に変わることを考慮し、より良い政府戦略が必要と言及。	縦割り対応を防ぐシステム強化のため、中長期的な視点を提唱。	移民を地域社会に溶け込ませる必要性を強調。	フォローアップの仕組みと継続的な支援の必要性を強調。

ものである。

表1は、移民キャラバンを管理するための人材の準備、政策と資源に関する準備、機関間の調整の重要性について、5人のインタビュー対象者の意見が一致していることを示している。すべてのインタビュー参加者が、移民の地政学的状況や文

化的背景に対する認識を促進するための具体的な訓練の必要性を強調している。より良い計画、調整、リスク管理は、政府機関横断的であるべきとの主張である。移民危機への統一的かつ効率的な対応を確保するためには、政府機関、NGO、市民社会組織を含む利害関係者間の効果的な調整が

必要であるが、条件的に最も困難な問題でもある。

予想されたとおり、具体的な課題や解決策に関する優先順位は、各インタビュー参加者の主な活動や組織の関心事によって異なっていた。例えば、心理的・文化的側面に焦点を当て、移民の文化的背景や援助提供に対する要望を理解する必要性（受援者の視点）を強調するインタビュー参加者もいれば、政府の能力強化や組織間調整の重要性（支援者の視点）を強調するインタビュー参加者もいた。興味深いことに、例えば教育面において、質の高い支援を提供するための前提条件として、正確なデータと情報追跡メカニズムの必要性を指摘するインタビュー参加者もいた。しかし、災害救援に深く関わる機関に所属するインタビュー参加者は、人道憲章や人道的対応における最低基準（スフィア・プロジェクト）のような国際的な勧告に従った、迅速な資源の配備や避難所でのコンプライアンスなど、より運営的な側面を強調した。これらの違いは、移民キャラバンへの対応におけるインタビュー対象者のさまざまな経験や参加を反映しているが、それらを総合すると、国際的な基準を順守せよという圧力と現地のニーズとの関係についてのユニークで包括的な見解が得られ、直面する課題の潜在的な解決策が浮き彫りになる。

5. 印象的なエピソード

一般的に、インタビュー参加者の意見は、国際的な枠組みや国際移住機関の勧告（Guadagno et al., 2017）と整合しているとはいえ、インタビューは、これら国際機関による勧告に、具体的な「意味」を加える豊かな内容を提供している。例えば、インタビューでは、ある政党から別の政党への政権交代が引き金となり、政府の政策が大幅に変更されたため、移民への対応において、移民だけでなく現場の当局にとっても、手続き面だけでなく運営においても、かなりの複雑な対応が生じたと述べられている。

「（入国許可の手続きの一つである）人道的カード発給の大きな問題は、（メキシコ）国内を自由に通過できることだが、これは難民申請とは矛盾し

た手続きである。たとえば、難民申請をチアパス州でした場合、チアパス州から他の場所に移動することは許可されない。しかし、このカードを持っていれば、他の場所に移動することができてしまう」

また、運営面について次のように述べた。

「キャラバンは（国境を分ける）国際橋の上にいた。メキシコ政府が全員にデジタルカードを発給することになったため、横断の許可がなされるまで、そこに居ついた。そこでの問題は、発給する十分な手段がなかったことだ。（書類作成のための）印刷機も入国管理局も十分ではなかった。突然、ある日100人の移民が現れ、次の日には2,000人になっていた。移民らは情報を共有し、連絡を取り合った。なぜなら、誰もが完全に管理不能になっている手続きであることに気づいたからだ」

政治的な意図も含め、さまざまな思惑をもった異なる集団で構成された移民キャラバンを追跡・管理することは、後に連鎖的な影響によって、政府の対応を複雑なものにした。明確で広範な移民に関する国家政策が十分に確立されていなかったり、省庁によって対応が異なったりすれば、混乱を招き信頼が損なわれ、移民の当局に対する認識を損なうことになる。キャンプ地やシェルターの不備は、特に社会的リスクに対して移民キャラバンをより脆弱にし、異なる国の犯罪者のつながりを生み出し、犯罪組織の能力を高めるなど、長期にわたる負の結果にもつながっていく。この点については、一般的な議論や国際的な勧告にも触れていないことである。あるインタビュー参加者は次のように述べた。

「窃盗が多く移民を労働者として雇おうとする事件もありました。私たちの知らない間に、スタジアムの外で仕事を依頼するトラックがやってきて、移民を乗せていたんです。夜だったので、（宗教団体の）シスターが行って（不審者の車から）人々を降ろしました。しかし、移民はお金が必要で、

出て行くつもりでしたね。すべての犯罪組織が言ったようなことです。この人たちは大砲の餌だと。移民らはその後、ビジネスを始めました。地元のカルテル、地元の凶悪犯罪者は外国のグループとつながっています。地元の犯罪とメキシコ国外の犯罪とのつながりの扉を開いています」

文化の違いによって、料理や地域の食材が大きな感情的反応を引き起こすことがある。例えば、インタビューに答えた一人は次のように述べた。

「レディ・ビーンズ (豆の女) として有名になった移民キャラバンの中ジュラス人女性がいる。彼女は、提供された豆が「豚が食べるものだから」^[4]という理由で、パリージョ・スタジアムで食事を拒否したのである。しかし、そのことは、メキシコでは誰も知らなかったことで、ホンジュラスの食べ物90%は豆であるが、彼らは主に小豆を食べている。そして彼女がメキシコで受け取った色の豆は家畜に与えられるものだった。結局、この女性は悪名高い存在となった。多くの人々 (メキシコ人) は「ほら、私たちは彼女たちを助けているのに、彼女がどうやって私たちに返しているのか見てみなさい。彼女は私たちを拒絶しているんでしょう?」

もう一つの食事に関する例は唐辛子についてだった。

「移民が来ると料理人は料理に (メキシコでは一般的だが) 唐辛子を入れる。このようなちょっとした行動が影響を及ぼし、(中米地域では唐辛子を入れた料理はほとんどないことから) 人々が食事を摂らなくなる。食べ物が残ったり腐ったりしてしまう」

移民対応を行う人々の準備と適切な訓練は、移民との衝突を軽減し、特定の集団へのリスクを低減するために不可欠である。例えば、家族分離という重要な問題もあった。「文字通り、兄弟姉妹、子ども、いとこが迷子になったケースがありまし

た」との証言もインタビューからえられた。子どもは特に注意深く見ておく必要がある。未成年者が移民としての手続きを早くするために利用された事例があり、「彼らは子どもを利用して。なぜなら、子どもを連れて行けばアメリカに早く行けるから」との指摘もあった。

マイノリティのマネジメント計画では、ジェンダーも考慮する必要がある。シェルターにおいて「彼らがやったことは、人々を大量に収容して、それを2つの区域に分割したことだった。そのため、一方には子ども連れの家族、LGBTIQ+, リスクにさらされた女性たちがおり、もう一方には、一人である人々がいました。問題は、その当時、約8,000人から12,000人もの人々が集まっていたということだ」。

6. 未来へのメッセージ

インタビュー参加者によると、移民キャラバンや大移動を管理する場合、将来の初動対応者は総合的かつ包括的なアプローチを採用しなければならないと話している。ベンタ氏が指摘したように、「準備の整った人材と組織的な備えが重要」であり、移民の文化的背景を認識する必要性を強調した。アロヨ氏は、心理的支援、適切な健康診断、管理と治療に関する政策など、「より良い計画とリスク管理」の重要性を強調した。ゴメス氏は、「政府の能力強化と組織間・組織内の調整」の必要性を強調し、国家システムの強化による中長期的な解決策を提唱した。タラベラ氏は、「正確なデータと情報管理」の必要性を指摘するとともに、政府機関と市民社会組織の間のより良い調整の必要性を強調し、脆弱な公共政策の上に不適切なシェルター対応が、移民を社会的危険に対してより脆弱にしていると強調した。最後にメンドーサ氏は、移民と対応者双方の安全と安心を確保するための「効果的なガバナンスと備え」の重要性を強調した。

7. 結論

本ケーススタディは、意思決定者の証言に基づく回顧的な視点をを用いることで、移民対応におけるシナリオ構築のための優れた実例が得られ、国

際的なガイドライン作成のための実践的なインプットになることを示した。

今回報告された事例は、移民の数が多く、栄養バランスのとれた食事の提供、衛生環境の整備、ジェンダーへの配慮など、大規模自然災害における避難所運営の複雑な問題と多くの共通点が見られた。また、在日外国人の増加を考慮すると、文化的配慮の行き届いた管理は、本事例研究で得られた最も重要な知見のひとつである。

こうした過去の事例を用いた研修の実施は、特定の政治家や現在の政府当局に負担をかけることなく、政治的スタンス、信頼の問題、不適切な対応による悪影響、研修や最低基準の遵守不足といったデリケートな話題について議論を促進することができる。また、人的・物的リソースの準備や、政策の質と課題、当局と脆弱なグループとの関係とそこからもたらされる結果に関する重要な問題を特定するのにも役立つ。

この歴史的出来事について、インタビューによって様々な視点から状況をグローバルかつ総合的に見ることができ、国際的な枠組みに対しても重要な教訓を得ることができたと言える。

謝辞

インタビューに快く応じてくれた参加者に感謝

します。また本研究は、地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム (SATREPS)「北中米太平洋沿岸部における巨大地震・津波複合災害リスク軽減に向けた総合的研究」(JPMJSA2310)の成果の一部です。

補注

- [1] ミックス・フロー・キャラバンとは、移民、難民、無国籍者など様々な属性で構成されるキャラバンを指す。
- [2] 社会部門からもたらされる資源の量は、まだ定量化されていない。
- [3] 音声記録 (<https://1drv.ms/f/s!Ao44UxUfxpjCjop5D9kULf8V2-TCNg?e=VEao2M>) および翻訳記録 (https://1drv.ms/f/s!Ao44UxUfxpjCjop_hQwhbCDyz8T76g?e=soysI)
- [4] ビデオは以下の URL で見ることができる：
<https://www.youtube.com/watch?v=KpUmPpKegCA>

参考文献

英文と同一。

(投稿受理：2025年4月30日)

要 旨

メキシコは地理的にアメリカに隣接するため、様々な背景を持つ移民がアメリカを目指す際の主要ルートのひとつとなっている。このような背景から、2018年10月、中米の人々がソーシャル・ネットワークを通じてアメリカへの移住を呼びかけ、大規模な移民キャラバンが形成された。その規模と移民のニーズから、移民キャラバンはメキシコで複雑な対応を引き起こし、災害管理と人道的対応における重大な課題を浮き彫りにした。本研究の目的は、複雑な大量移民の状況に対処するための、重要な災害予防と管理のテーマを回顧的に特定することである。本研究では、移民キャラバン対応に関与した国際機関、政府機関、市民社会組織に属する主要な意思決定者にインタビューを実施した。その結果、例えば、透明性のある総合的な政府対応は、文化的背景にも配慮することが重要であることが浮き彫りとなった。そして、移民が持つ様々な背景とともに、移民が通過する地域社会の福祉も考慮され、移民と地域社会双方の理解の促進が重要であることを指摘した。

和訳：中野元太（京都大学防災研究所准教授）